県立広島病院広報誌
もみじ
第42号
2012.8.1
発行

県立広島病院　〒734-8530 広島市南区宇品神田1丁目5番54号

※県立広島病院の様々な情報をホームページへ掲載しています。
県立広島病院 で 検索 （URL：http://www.hph.pref.hiroshima.jp/）

理念：県民の皆様に愛され信頼される病院をめざします

連携医院のご紹介

今回は、何でも相談できる「まちのお医者さん」廣本クリニック、廣本先生です。

廣本先生

廣本クリニック

〒736-0086
広島市安芸区矢野南3-1-2
電　話／082-888-5077
院　長／廣本　雅之
診療科／内科、消化器科（胃腸科）、外科、肛門科、ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ科

○いつ頃開業されましたか。

平成8年から廣本浄子先生が内科で「廣本クリニック」を開業しました。平成12年からは外科も合わせて診療するようになりました。

○廣本先生が毎日の診療で大切にされていることは何ですか。

患者さんにわかりやすい言葉を使うことですかね。あとは、何科に行ったらいいか分からない患者さんでも、何でも診ます。そこから、専門の診療科に振り分けていけたら良いかなと思ってます。

○開業医としてのおもしろさはどんなところですか。

「現場」での対応ですかね。大学時代、外科と救急医療からスタートしたところに原点があると思います。救急で、ドタバタしている現場にやりがいを感じますね。救急災害時医療グループにも入って活動しています。「現場」という言葉に通じますが、往診にも力を入れています。在宅から看取りまで「在宅に救急の力をいれる」ことにこだわって、地域のスタッフと連携して幅広く対応しています。

○県病院についてひとことお願いします。

開放病床がもっと使いやすくなれば良いですね。あとは、医師との電話連絡など、もっとスムーズにできればいいなと思います。開放病床利用の患者さんの様子を見にいったときに、担当の先生と話ができやすいのは助かりますね。

廣本クリニック外観

【取材後記】

趣味は旅行で、語学も堪能で4ヶ国語がお話できるそうです。外国人の方のために英語とフランス語で書かれた名刺もご使用されていました。でも、診察室にはくじらのぬいぐるみがいっぱい。「ぬいぐるみも好きですよ」とのことで、そのギャップがなんだかほっこりさせてくれる素敵な先生でした。

県立広島病院からのお知らせ

第1回 脳卒中診療もみじネット

とき　平成24年8月22日（水）19:00～20:30
ところ　中央棟2階　講堂
テーマ　虚血性脳血管障害治療の最新情報
講師　脳神経内科　仲　博満
脳神経外科　溝上　達也
対象　脳卒中に携わる医療従事者の皆様
主催　脳神経内科・脳神経外科・地域連携科
問合せ先　地域連携科　TEL:082-252-6241

8月のがんサロン

とき　平成24年8月29日（水）14:00～15:30
ところ　新東棟2階　総合研修室
内容　学習会・交流会
対象　悪性腫瘍(がん)で通院または入院されている患者様及びそのご家族
問い合わせ先　地域連携科
TEL:082-256-3562(直通)

※詳しくは県立広島病院ホームページへ 県立広島病院 で 検索 （URL:http://www.hph.pref.hiroshima.jp/）

外来診療のご案内

診療受付時間

午前８時30分～午前11時00分
※午後の診察は科によって異なります。

休診日

土曜日・日曜日・祝祭日
年末年始（12月29日～1月3日）

紹介状持参のお願い

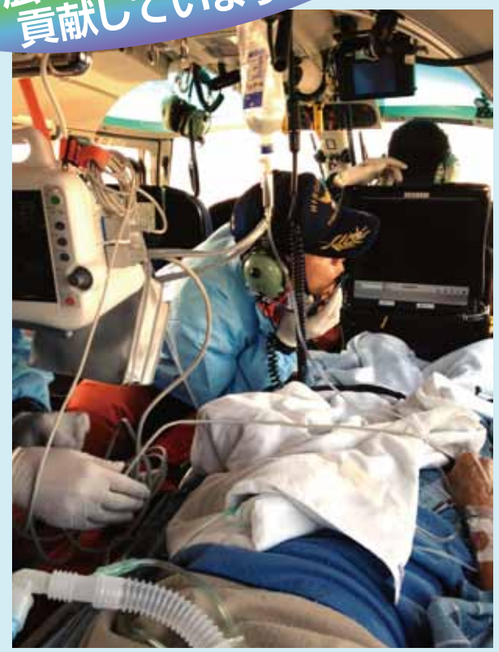
初診時、他の医療機関からの紹介状をお持ちでない場合、保険診療費のほか2,620円のお支払いが必要となります。初診の際には、紹介状をお持ちください。

※当院では、予約診療を優先して診察しています。予約診療以外で受診されると待ち時間が長くなることがありますので、ご了承ください。

ヘリコプターによる救急患者搬送

ヘリポート到着後、直ちに患者を搬送します

広域の救急医療に貢献しています。


機内の様子です。一刻を争います。

ヘリポートのある屋上

広島県では現在、広島県及び広島市の2機のヘリコプターを使用しています。

当院の中央棟屋上には、ヘリポートが設置されており、中山間地や離島といった遠隔地の救急現場に対して、ヘリコプターによる医師・看護師の派遣や患者搬送を行っています。

平成25年度には、広島県ドクターヘリ専用機の導入が決まっており、今後は広島大学病院等と協力して、さらに迅速に現場等に赴き、初療を行う事業が開始されます。

診療科だより 第20回 小児科

小児病棟の壁に描かれている可愛いイラストに心が和みます

今回は、小児科の坂野主任部長にインタビューです！！

はじめに、「小児科」について教えてください。

坂野主任部長

小児科外来では、午前中は主に一般の感染症を診療し、午後は慢性疾患の診療、予防接種、乳児健診を行っています。小中学生、高校生は学校帰りの16～17時に受診し、それから検査を開始しますので、外来の終了時刻も遅くなり、検査科、薬剤科および近隣の院外薬局に迷惑をおかけしています。

小児病棟は小児科、小児外科、新生児科に限らず、眼科、耳鼻科、脳外科などの患者さんも入院しています。小児に対する看護・医療技術は成人と大きく異なっていますので、小児に精通した看護を受けることは患者さんにとってきわめて有意義です。病棟内では、平日には保育師さん、土曜日にはチャイルドライフスペシャリストにより、入院生活が少しでも楽になるように援助をしています。また、院内には小中学校があり、勉強のレベルもよいので、退院後の学校の授業にそのまま継続できます。

小児科では、どのような診療が、どんなスタッフによって行われていますか？

当科では幅広く様々な疾患を診療しておりますが、中でも、腎疾患、免疫疾患をもつ患者さんが多く紹介入院してきます。これらの患者さんはステロイド剤、免疫抑制剤、生物学的製剤により感染に弱くなっていますので、感染予防が必要です。このため、小児病棟は感染症と感染のない患者さんのフロアーを隔別し、担当する看護スタッフも別々にしています。また、異なる感染症の患者さんを同室にできないことから、感染病床は、基本的に個室、室内トイレを設置しています。しかし、ときに非感染病床に入院している患者さんの発熱もあり、その都度、発症した患者さんの病室移動、周囲の患者さんへの対応でドタバタします。

最後に、小児科としてこころがけていることを教えて下さい。

小児の疾患分野別の専門医療が進歩する中、慢性疾患を持つ患者さんは小児科で長期に治療・管理を継続するようになり、大学生、社会人といった成人の患者さんも多くなっています。当科でも、このような患者さんを成人科へうまくトランジション（移行）していくことが重要な課題となっています。今後は当院や近隣の病院だけでなく、一般診療所を含めた成人科の先生方への紹介が多くなると思いますので、関係の皆様方にはご対応につきよろしくお願いいたします。

小児科（関連）の医師スタッフの皆さんです

看護部だより

小児科外来

ご家族の方の支えになる様に心がけています。

小児科外来では小児科・小児腎臓科・新生児科・小児外科の４科の診察が行われています。看護師4名と午後からNICUから1名の応援看護師とメディカルクラーク3名がいます。苦痛を伴う検査や処置もあり、泣いたり逃げ出したりと思わぬ微笑ましさもあり賑やかな診察室です。病気の説明が長くなるほど子供達は退屈し、診察台や机の下にもぐり込んだりすることもありますが、安心安全で楽しく診察出来る様に工夫しています。また、在宅でも安心して生活出来る様に電話相談や訪問看護ステーションとの連携を行っており、患者・家族に寄り添える看護を心にそれぞれの場所で取り組んでいます。

小児腎臓科は中四国でも少ない診療科であり山口県や島根県等遠くからの通院もあります。慢性疾患を抱えながらも自分らしく楽しく活気ある生活が送れる様に、学校が終ってからの予約を多くしています。夕方の待ち時間が長くご迷惑をかける事もありますが、私達は自分の病気と上手く付き合いながら成長している姿を見るのがとても嬉しく小児外来の醍醐味を味わっています。

小児科外来の皆さんです

外科医の独り言 no.11

― 検査の功罪 ―

最近の健康ブームを反映してか健康に関する本が数多く書店に並んでいます。その表題につられてついつい買ってしまいますが、医師自らが我が国の検診制度は意味がないどころか罪であると書いてある「検診で寿命は延びない」「がん検診の大罪」という本が目にとまりました。一通り読んでみましたが、「なるほどね、一理あるかも」と思わせる指摘がある一方で「そりゃあないじゃろ」と思わず広島弁が出てしまう記述も見られます。

検診に限らず病院にかかって何か検査をすると、その結果が気になってストレスが溜まりますよね。検査の前から心配で不眠を訴えられる患者さんもいます。もしかして“がん”じゃないかと。“がん”でないとわかれば一気に気持ちが楽になり良かったと思う反面、あんなに心配して損をしたと後悔されることもあります。がんの手術後であれば常に再発の心配が付きまとい、検査のたびに一喜一憂することになります。再発がないことを伝えると「あーこれで次の検査までの半年間安心して寝られます」と患者さんに言われた時、検査することが患者さんにとって本当に良かったのかと疑問に思うこともあります。しかし検査をしなければしないでまたストレスになりますよね。そこで行き着いた私の結論は、『検査は必要最小限に。状況によっては検査をしない』でした。約10年前、当時83歳の父親に進行胃癌が見つかり私が手術することになりました。見た目にはすべての癌を切除し元気に退院しましたが、手術の時点で遅かれ早かれ再発する可能性が高いなと直感しました。通常なら再発を早く見つけるために3ヶ月に1回の血液検査、半年に1回のCTを行いますが、私は一切検査をしないと父親に伝えました。父親に検査をしない理由をどのように話をしたかはよく覚えていませんが、素直に受け入れてくれたような記憶があります。検査のたびに田舎から広島に出てくる苦労も理由の一つでしたが、検査で再発を早く見つけても当時の抗がん剤治療や再手術で治せるがんではなかったので、検査をして余計な心配をさせたくなかったというのが本音でした。検査をする意義が見つからなかったので、それこそ意味のない検査はしないほうが良いと勝手に考えたのです。それまで親孝行らしい事をしたことがなく、最初で最後の親孝行のつもりでした。最終的には歯肉がんという別のがんが見つかり、胃がんも再発して手術後3年で亡くなりましたが、几帳面な父親でしたので術後定期的に検査をした方が父親にとってストレスがなかったのかもしれません。この件に関して父親は何も言わなかったので今となっては真意がわかりませんが、帰省して墓参りするたびに、「検査で広島に行って孫の顔を見て、美味しいものが食べたかった」と言っている父親の顔が浮かんでくる親不孝な息子でした。

副院長（消化器･乳腺･移植外科主任部長）
板本敏行（いたもと　としゆき）

七夕コンサート

今年で16年目を迎えました

毎年恒例の「院内コンサート」が7月6日に中央玄関ホールで開催されました。当院では、患者様に安らぎや季節感を感じていただくように『プロテウスアンサンブル』によるコンサートを年2回七夕とクリスマスに開催しております。会場に集まった多くの方々は、プロテウスアンサンブルの奏でる音色に包まれ、最後は「七夕さま」を合唱し、ゆったりとした時間を過ごしました。

様々な演奏を楽しめます

院長先生の挨拶

音色に聞き入る患者様、来館者様